エセ大阪弁の音声学的特徴*

福盛　貴弘†・金濱　茉由††

【要旨】本稿では、エセ大阪弁の音声学的特徴について記述することを目的としている。エセ大阪弁とは、日常的に使われていない語形や音調によって、大阪弁話者が違和感を覚える言葉を指す。大阪弁話者がエセ大阪弁を受けつけない理由として、音調における社会的機能が挙げられる。こういった背景をふまえて、言語形成地を東日本で過ごした被調査者 10 名を対象として、提示した文を自身が考える大阪弁の音調で読んでもらった。結果として、句音調が負の言語転移となる、式音調が脳内辞書に入っていない、アクセントの下がり目の位置を意図的に変えてしまうといった要因が、エセ大阪弁の音調を構成する要因となっていることが検証された。

キーワード： 大阪弁、エセ大阪弁、アクセント型、式音調、句音調

1. 序

1.1 エセ大阪弁は腹が立つ

テレビで上方芸人が「エセ大阪弁は腹が立つ」と言っているのを耳にする機会は、全国的に増えているように思われる。上方芸人が全国区になった大きな要因として、1980 年代における漫才ブームが挙げられる。漫才ブーム以降、上方芸人が全国ネットの番組に登場する機会が増え、東京だけでなく全国的に大阪弁への拒否感、抵抗感、嫌悪感は薄くなったと考えられる[1]。また、マスメディアの普及で、大阪における東京弁への拒否感、抵抗感、嫌悪感も若干ながら緩和されつつあると考えられる。しかし、仮に共通語話者が大阪弁話者に親しみを込めて大阪弁っぽく話したとしても、そのエセ大阪弁に対する大阪弁話者の拒否感、抵抗感、嫌悪感は根強い。共通語や東京弁は認めても、エセ大阪弁だけは許さないという気概すら感じる。

エセ大阪弁を形成する主な要因は、語形ならびに音調である。語形としては、大阪弁話者にとっ

---

* 本稿は 2017 年度に大東文化大学外国語学部日本語学科に提出された卒業論文「エセ大阪弁の音響音声学研究」（金濱 2018）を全面的に加筆改訂したものである。査読者から貴重なコメントをいただき、この場を借りて感謝の意を申し上げる。なお、エセ大阪弁に対する英訳の定番がなく、pseudo-Osaka dialect に至るまでに、以下のように検討した。faked のように騙すニュアンスはなく、strange は未知で奇妙なという意味となり、どちらも母方言話者の感覚には合わない。pseudo-word は音声があっていて意味がおかしい語として、知覚実験で使われる用語である。その意味としては、pseudo-Osaka dialect は逆になってしまうが、説明がなされていれば理解できるというコメントを得られたので、pseudo を採ることにした。他に、母方言話者としては odd や weird が感覚的には合うが、学術用語としてなじまないと判断し、棄却した。こちらの検討にご協力いただいた方々にも感謝の意を申し上げる。

† 大東文化大学外国語学部

†† 本学会会員

[1] 尾上 (1999: 136-142)では、昭和 30 年代と比べ、昭和後期から平成にかけて大阪弁のイメージが変化している実態について述べられている。かつては、めめしい、くどい、反理性的、反規範的、下品で猥雑というマイナスイメージであった。しかし、平成 4 年の調査では、勢いがある、元気がよい、さっぱりしている、あたたかい、おもしろいというプラスイメージに変わっているようである。井上（1989：224-241）による全国調査では、大阪弁は知的評価は-0.4、情的評価は+0.4 とされ第二象限に位置づけられ、東京弁の知的 1.0、情的 0.0 とは分布が異なる。知的プラスは、都会的、近代的、標準語に近い、正しい、歯切れがよいといった要因が主にかかわっており、それらの要因については大阪弁では低いということが確認されている。また、面白おかしい、ユーモアがある、ざっくばらんといった要因は、知的評価のプラスには関与しないことも確認されている。

て使用頻度が少ない[2]「でんがな、まんがな」「でんねん、まんねん」などの語尾や、「もうかりまっか」「ぼちぼちでんな」のように日常的には廃れてしまった表現が該当する。従って、「関西人にしか見えないっちゅうわけでおまんがな!!」「それにや！　おっちゃんタバコ左手に持ってたようやけど…　おっちゃん右利きとちゃいまっかー？」「ラーメンのハシ、右側に置いてるさかいなァー！」「わざわざそんな事した理由は簡単でんがな」[3] (『名探偵コナン』74: 110)のような発言は、不快や嫌悪を超えて憎悪を感じてしまう大阪弁話者が一定数存在する。一方で、日常的に用いられている表現として、例えば「なんでやねん」「しんきくさい」「ああ、しんど」などは、語形そのものは受け入れられる。ただし、音調が異なると受け入れられる度合いは激減する。

大阪弁話者がエセ大阪弁を受け付けない要因として、音調における社会的機能 (城生 1989: 87、郡 1997: 197-199)が考えられる。もちろん、音調そのものに拒否反応を誘発する要因があるわけではない。ここでいう社会的機能とは対人関係を円滑に進めるための働きであり、任意の場面において聞き手の期待にそぐわない音調であると人間関係が損なわれるという性質を持つ。大阪弁話者がエセ大阪弁に抱く拒否感、抵抗感、嫌悪感は、音調における社会的機能に起因するのである[4]。

さて、関西弁という呼称があるが、これは学術的に定義された用語ではない。関東は行政区分で都県が指定されているが、関西というのは府県の単位では指定されていない。関西という漠然とした総称を用いるのは、大阪や京都といった特定の地域に特化するとそれぞれの違いだけが際立ってしまうため、細かい差異は抜きにして大きく一まとめにして同胞として捉えようという意識が影響している可能性が考えられる。しかし、方言音調の中でも特にアクセント体系は、近畿一円及びその周辺で原理は似ているものの、細かい差異がある[5]。よって、受け入れられる度合いは、話者がどのアクセントを基本として話しているかによって変わってくる。そこで、本稿では筆者らに最もなじみがある大阪弁に特化して、腹が立つ、違和感があるといった要因となっている音声学的特徴を考察しようと考えた。なお、本文中、大阪方言ではなく大阪弁としている理由は、俗語としての「エセ大阪弁」に合わせた呼称にするためである。

1.2　大阪弁のアクセント

エセ大阪弁において、アクセントが異なる場合に、大阪弁話者の拒否感、抵抗感、嫌悪感は増幅する。そこで、まずは大阪弁のアクセントの概要を確認していくことにする。

---

[2] 大阪弁話者の中でも、世代差や地域差や性差によって使用頻度が異なる。従って、青年層が使わないからといって死語になっているわけではない。

[3] 『名探偵コナン』74 巻、FILE5～7 における事件で、関西人であることを隠している人が犯人であるという仮説をもとに、疑わしい人物に江戸川コナンが発したのが一連のセリフである。それを立て続けに聞いた犯人が逆上して「ええ加減にせぇよ コラァ!!!」「急にけったいな関西弁使いよって… どーいうつもりじゃボケェ!!」と発しているのは、関西人がエセ関西弁を聞いた時のステレオタイプ的な流れである。テレビアニメ版「#651 コナン VS 平次 東西探偵推理勝負」 (2012/3/24、読売テレビ、日本テレビ系列)でコナンが発した一連のセリフは、いわゆる関西人の許容範囲を超える逸脱音調 (例:「それにや」LHHL 大阪弁 HHHL、「簡単でんがな」HHHH LHLL 大阪弁 LLLL+HHLL)であったため、横にいた服部平次のいらつきや犯人の逆上への流れに共感する関西人は一定数存在する。 (関西人、関西弁という呼称は原文ママ)

[4] 例えば、城生 (1989: 87)では以下のような所感が述べられている。

> 日本語のアクセントの本質は、意味の区別とか語をまとめる働きとかいう問題以前に、まず第一にそれを聞いた時にゾッとするかしないか、ムシズが走るか走らないかといったところにあるものと考えたい。

音声言語を研究対象とし、語における機能を客観的に分析しようとする立場でない者にとっては、むしろ感覚的に受け付けるか受け付けないかといった点が本質であるという指摘は素直に首肯できるのではないかと推察する。また、著者は東京弁話者であり、東京弁としてはあり得ないアクセントで発音された音声を聞かされた時の東京弁話者としての本音であろう。

[5] 関西弁を捉えるにあたって、井上（1989：237）では近畿と四国が第二象限に位置づけられ、これをもって広義の関西弁を位置づける一つの要因となりうる。一方で、近畿方言の中で情的評価による分離が示されている。情的プラスとして京都＞三重＞大阪＞滋賀＞兵庫、情的マイナスとして奈良＞和歌山となっている。この評価の違いは、同じ関西弁とくくられることに対して抵抗がある人にとっては、重要な要因であろう。

大阪弁アクセントの概要については、福盛 (2010：240-241)では以下のように記されている。

> 共通語のアクセントは「下がり目[6]があるかないか、下がり目があるとすればどこにあるのか」という特徴がありましたが、京阪方言ではこれに加えて「高く始めるか、低く始まるか」という条件があります。 (中略)これは、単語によって高く始まるか低く始まるかという式音調[7]の指定が加わっているからです。「桜」「詐欺師[8]」「心」は高く始まる高起式、「雀」「兜」は低く始める低起式のアクセントになっています。高起式は下がり目がない限り高いままの音調が続きます。よって、「桜」の場合、下がり目がないので高平となるのです。低起式は下がり目があればその直前のモーラだけが高くなり、下がり目がなければ最後のモーラで高くなっています[9]。「雀が」であれば「低低低高」のようになります。

上述の例をふまえると、「桜」「雀」は下がり目がなく(0 型[10])、「詐欺師」「兜」は 2 モーラ目の後ろに下がり目がある (2 型)。下がり目の位置については同じであるが、式音調が異なるので音声実現形は異なる。これらの語の音調は以下のとおりである。「桜」は高起式なので「高高高 (H0 型)」、「雀」は低起式なので、「低低高 (L0 型)」、「詐欺師」は高起式なので「高高低 (H2 型)」、「兜」は低起式なので「低高低 (L2 型)」となる。よって、高起式では高いモーラが複数個所あらわれることがあるが、低起式では高いモーラ (あるいは音節)が 1 か所しかあらわれないのが特徴となる。

そして、複合語になると、式保存の法則が働く。式保存の法則とは、前項の式音調が複合語全体に影響を及ぼすという法則である。例えば、「きつね」は低起式下がり目なしなので「低低高 (L0 型)」、「冷やし」および「うどん」は高起式下がり目なしなので「高高高 (H0 型)」である。これらが複合語になる場合、「きつねうどん」なら「低低低高低低 (L4 型)」のように低起式で「うどん」の 1 モーラ目の後に下がり目があるアクセント型 (複合アクセント規則によって後項が 3 モーラの場合に-3 型になる[11])に、「冷やしうどん」なら「高高高高低低 (H4 型)」のように高起式で「うどん」の 1 モーラ目の後に下がり目があるアクセント型になる。

以上のように、共通語ではアクセント指定が下がり目のみであるのに対し、大阪弁では式音調が加わることによって、共通語話者にとっては共通語より複雑な体系となる大阪弁の音調を想定できなくなると考えられる。結果として、大阪弁を真似しようと思っても、大阪弁としては適切でないエセ大阪弁が生じるということが予想できる。

---

[6] アクセント核という用語を使わない理由については、福盛 (2014a)を参照しており、早田 (1999)をふまえて音節(モーラ)境界に下がり目を指定するという立場をとっているからである。また、下がり目という用語が音韻指定の用語として用いられる点については、福盛 (2016)を参照している。

[7] 式音調については、「高起式」「低起式」より詳細な分析による名称として「平進式」「上昇式」がある (上野 1989)。「上昇式」については、語末に高くなる遅上がりタイプと、1 モーラ目から 2 モーラ目にかけて高くなる早上がりタイプがある。大阪弁の式音調は「高起平進式」と「低起 (遅上がり)上昇式」の 2 タイプに分かれるが、本稿では、それぞれの略称として「高起式」、「低起式」という用語を用いている。

大阪弁では単語に対して下がり目と式音調の 2 種の要因が指定されるアクセントとなっている。査読者からこの 2 つにおいて式音調が優位であるのかという指摘を受けた。筆者は、どちらかが優位ではなく同時並行処理が行なわれていると推測しているが、階層性の有無については、大阪弁アクセント研究の今後の進展を待たざるを得ない。

[8] 「詐欺師」のアクセントについては、大阪弁では「高高低」から「低高低」に変わっている人が一定数存在する。そう言う人にとっては、「2 つ」や「君ら」に置き換えた方が分かりやすい。

[9] 「すんません」のように、語末の音節「せん」が高くなる語もある。

[10] アクセント型を示す数字については、0 は平板型 (下がり目なし)、正の数は前から数えた、負の数は後ろから数えたモーラ数の後ろに下がり目がある起伏型を意味する。

[11] 大阪弁における基本的な複合語アクセント規則は、以下のとおりである。後項が 1 モーラの場合-2 型 (真夏 L0＋日 H1→真夏日 L3)、2 モーラの場合-3 型 (あやめ L0＋池 H1→あやめ池 L3)、4 モーラの場合-4 型 (四つ珠 L0＋そろばん L0→四つ珠そろばん L5)になる。

1.3 目的

一般的にエセ大阪弁が論じられる際に、アクセントとイントネーションの区別がついていない記述や、アクセントにおける下がり目と式音調の区別がついていない記述が散見される。また、高低の 2 段観表記で記されている場合には、音調の違いは示しているが、その要因が説明されていないのが実情である。こういった現状をふまえ、大阪弁アクセントにおける式音調ならびにアクセント型が適切に用いられているかいないか、適切でない場合どのような特徴があるのかについて、エセ大阪弁の音声学的特徴を記述することが本稿の目的となる。

また、郡 (2004)において、「東京っぽい発音と大阪っぽい発音の音声的特徴」が示されている。この結果をふまえて、エセ大阪弁に共通語の影響があるかどうかについて音響音声学的に追検証を行なうことも併せて目的とする。

2. 方法

2.1 被調査者

本研究の被調査者は、小学校 6 年間を東日本 (東京、神奈川、埼玉、宮城、福島、長野)で過ごした 22 歳の男女 10 名を対象とした。また、被調査者は、大阪を含む近畿圏で過ごしたことがなく、マスメディア以外で大阪人と触れる機会が少ない人たちである。

2.2 分析資料

分析資料は以下の 19 文である。①～⑤は、共通語と同じ語形 (①～②)と大阪弁語形 (③～⑤)によるあいさつ文である。⑥～⑩は、岡本・氏原 (2006)[12]から引用した大阪弁語形による文である。⑪～⑮は、福盛 (2014b)「大阪方言 2000 文」から引用した共通語と同じ語形 (⑪～⑫)と大阪弁語形(⑬～⑮)による文である。⑯～⑱は、『難波金融伝・ミナミの帝王』[13]から引用した大阪弁語形による文である。⑲は、郡 (2004)における共通語と大阪弁とでアクセントが全て頭高型になる文である。

①こんにちは　②ありがとう　③ごめんな　④さいなら　⑤ほな
⑥何すんねん　⑦ようわからん　⑧馬鹿にせんといてや　⑨どないしたん？
⑩酔うたらアカン　⑪どこへ届けますか　⑫外国語を勉強しに旅行します
⑬なんにも見えへん　⑭お邪魔ちゃいますか　⑮すんません、遅れてしもて
⑯頭を上げておくんなはれ！　⑰萬田銀次郎の名がすたりまんがな！
⑱銭借りたモンは、死ぬ権利なんてあらへん　⑲去年、奈良のもみじを由美と見た

2.3 録音方法

録音機材は、マイクは USB ヘッドセット (サンプライ社製、MM-HSUSB7w)、取り込みは Cool Edit 2000 (Syntrillium 社製)を用いた。設定は、モノラル、標本化 44,100Hz、量子化 16bit である。

各被調査者に分析資料 19 文が書いてある紙を提示し、1 番から順に読み上げてもらって録音し

[12] 付属 CD で音声が収録されているが、今回の調査対象の年代に比べるとかなり古め (本研究でのモデル音声よりも上の世代)のアクセントであるので、そのアクセントについては本稿では参照していない。

[13] 『ミナミの帝王』の登場人物が話す大阪弁は、誇張された河内弁による仰々しい表現になっている。なお、V シネマならびに劇場版では、竹内力が萬田銀次郎を演じているが、大阪出身者ではない演技としての大阪弁であるため、そのアクセントについては本稿では参照していない。なお、⑱については単行本にも V シネマにも劇場編にも登場しない台詞であり、Web 上に名言として挙げられていたものを引用している。⑱について裏付け調査をした結果、1988 年に公開された「長編 5 時間版 1.運命」における「あんたが死んだかて、家族からとりたてるだけの話や。なにが責任をとるや。あんたがやろうとしとんのは、自分の責任を罪のない家族に押しつけるだけのことやないか。あんたには死ぬ自由なんぞあらへんねや。」を要約したものだと解釈した。

た。発話の際には、被調査者本人が考える「大阪弁っぽい話し方」を意識して発話してもらった。ポーズの入れ方や発話速度については被調査者自身の判断に委ね、こちらから統制していない。これは、統制を加えると被調査者本人が考える大阪弁を引き出せないと考えたからである。大阪弁モデル音声については、言語形成地を大阪市で過ごした 40 代男性が発音した。

録音場所は、大東文化大学板橋校舎 2 号館 6 階日本語学科共同研究スペースである。

2.4 分析方法

分析機材は、SUGI Speech Analyzer ver. 1.07 (Animo 社製)を用いた。各被験者における音調を基本周波数曲線において確認し、高低の 2 段観で記述した。その後、それぞれの文におけるエセ大阪弁の傾向性を音調別にまとめ、大阪弁モデル音声との異同点を検証した。

3. 結果

3.1 個々の音調と基本周波数曲線

以下に、分析資料のそれぞれの文に対して、被調査者がどのような音調で発話したかを示す。それぞれの文の右側に示すのが大阪弁での音調 (高：H、低：L)であり、下段に示すのが被調査者の音調：被調査者の人数である。長めの文に対しては、文節あるいは句の単位での音調を矢印 (→)以降に示している。基本周波数曲線については、大阪弁話者にとって不快である代表的な例 (ない場合は多数派の例)を示すことにする[14]。

①「こんにちは」　大阪弁 LHLLL (語末に強調型上昇調[15]があれば、LHLLH)
LHHHH：8、HLLLH：2

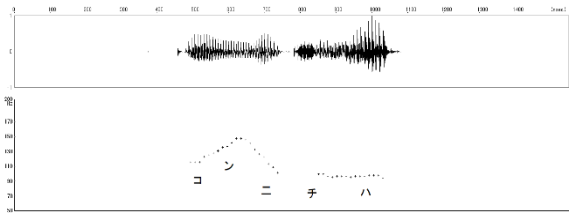


図 1-1：大阪弁

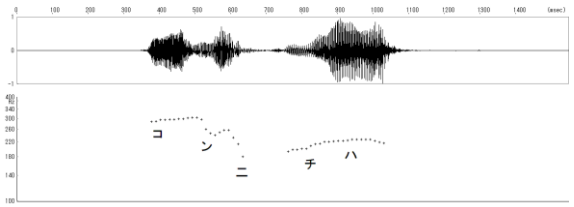


図 1-2： HLLLH

②「ありがとう」　大阪弁 LLLHL
LLLHL：9、LHHHL：1

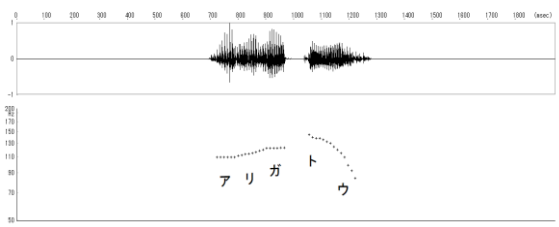


図 2-1：大阪弁

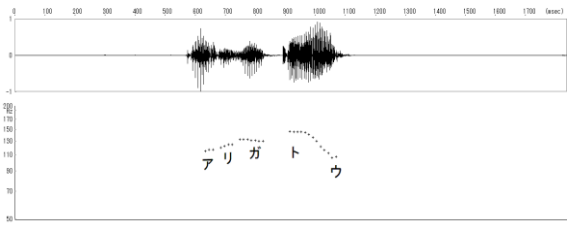


図 2-2： LLLHL

[14] 基本周波数曲線のキャプションは、エセ大阪弁については音調のみを記している。また、⑤については、全てが適切な発音であるため、不快ではない発音の基本周波数曲線を掲載している。
[15] 郡 (1997)では、疑問上昇調、強調上昇調と呼んでいたが、郡 (2003)において疑問や強調に特化される印象を回避するために、疑問型上昇調、強調型上昇調と改称されたので、本稿では「型」を付けた名称で示すことにした。

③「ごめんな」　大阪弁 LLLH

LHHH：6、HHHH：2、LHLH：2

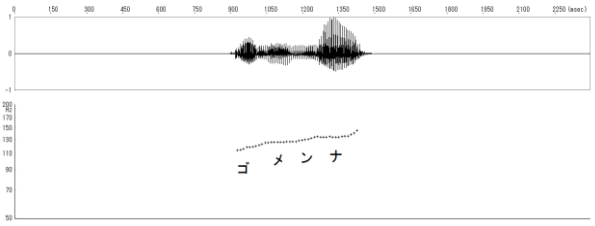


図 3-1：大阪弁

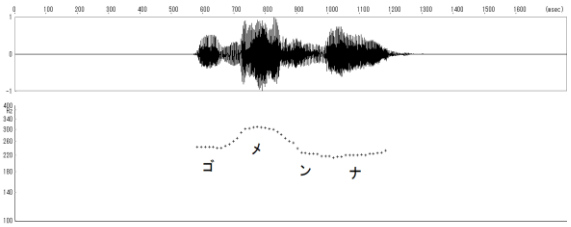


図 3-2：　LHLH

④「さいなら」　大阪弁 HHHH (強調形は HLHL)

LLHL：7、HHHL：2、HLHL：1

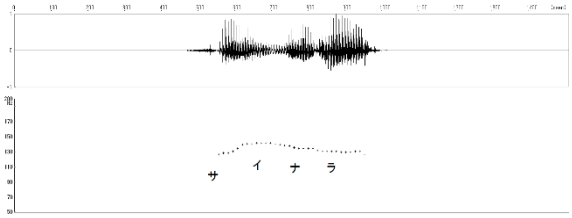


図 4-1：大阪弁

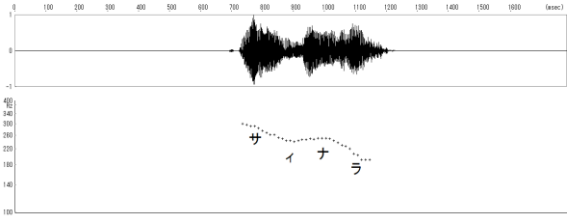


図 4-2：HLHL

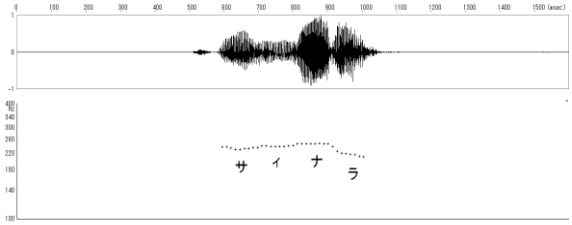


図 4-3：LLHL

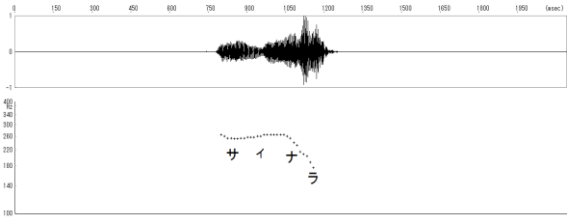


図 4-4：HHHL

⑤「ほな」　大阪弁 HL

HL：10

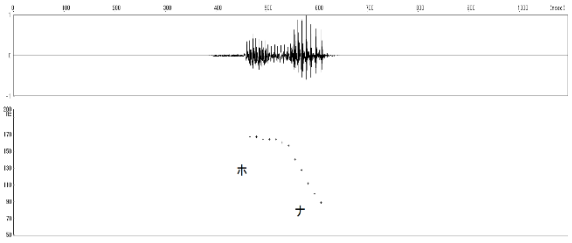


図 5-1：大阪弁

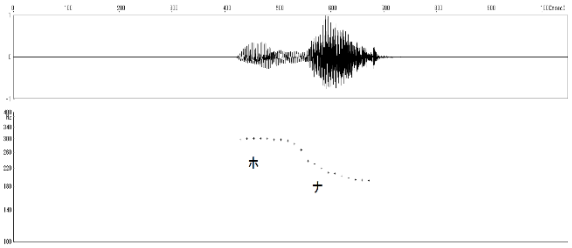


図 5-2：HL

⑥「何すんねん」　大阪弁 LL HHLL
LH HHLL：9、HH HHLL：1

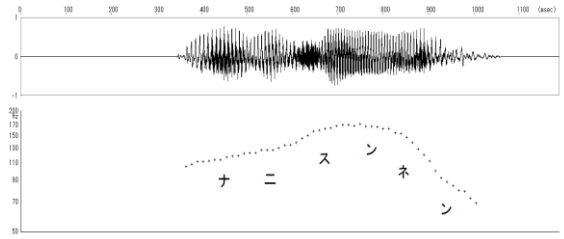


図 6-1：大阪弁

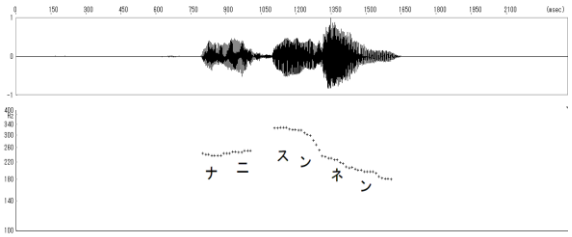


図 6-2：LH HHLL

⑦「ようわからん」　大阪弁 HL HHLL
HL LHHL：6 、LL HLLL：2、HL HHHH：1、HH HHHL：1

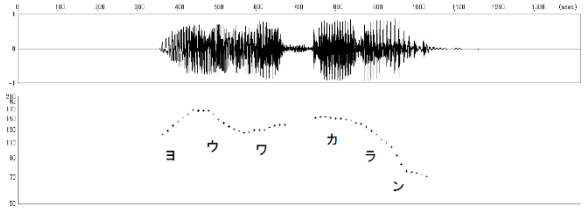


図 7-1：大阪弁

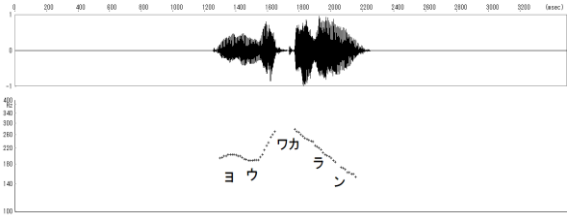


図 7-2：LL HLLL

⑧「馬鹿にせんといてや」　大阪弁 LLL HHHHHH
LHH HHHHHH：5、LHH LHHHHH：5

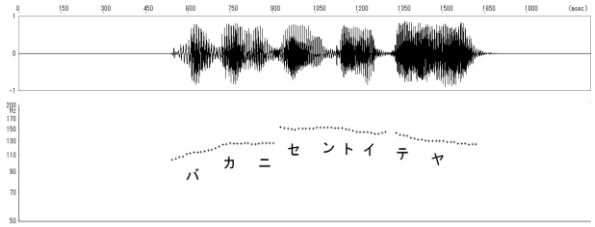


図 8-1：大阪弁

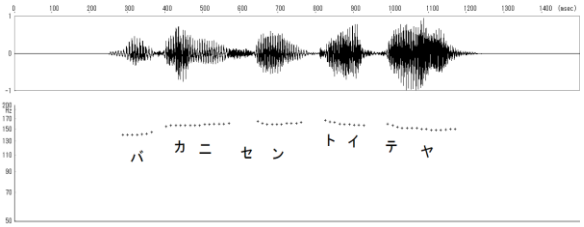


図 8-2：LHH HHHHHH

⑨「どないしたん？[16]」　大阪弁 HHH HLL
LHH HLL：7、LLL HLL：1、LLL HHH：1、HHH LHH：1

[16] 無声化の頻度は、共通語に比べて大阪弁の方が低い (菅井・福盛 2001)。この違いも、大阪弁らしさを構成する一要因であるが、大阪弁話者が全く無声化をしないわけではない。⑨における「した」における「シ」や、⑰における「すたりまんがな」の「ス」は、モデル音声でも無声化していた。よって、本稿では無声化の頻度の違いについては考察の対象にしなかった。

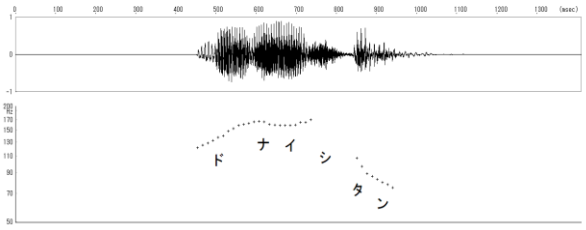


図 9-1：大阪弁

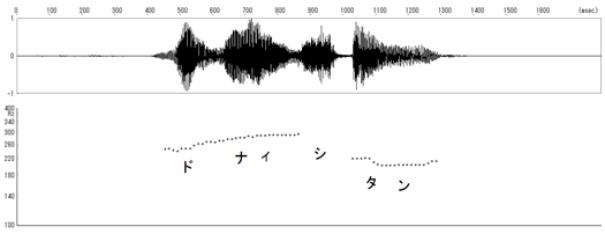


図 9-2：LHH HLL

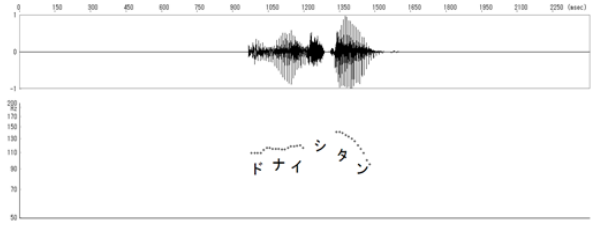


図 9-3：LLL HLL

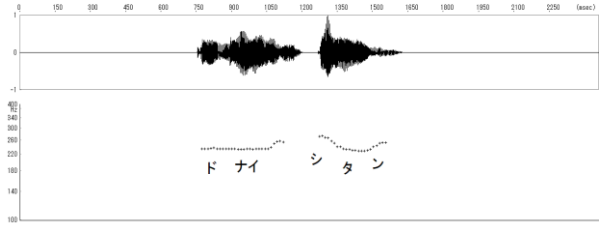


図 9-4：LLL HHH

⑩「酔うたらアカン」　大阪弁 LLHL HHH

HLLL LHH：6、LLHL HHH：3、LHHL LHH：1

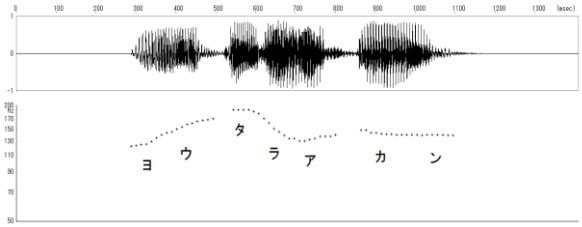


図 10-1：大阪弁

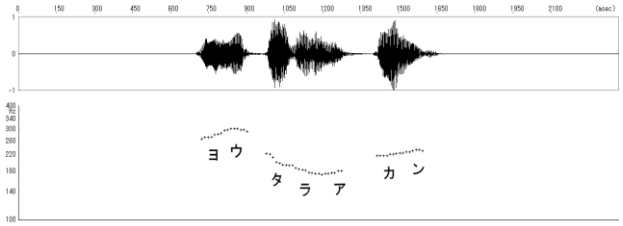


図 10-2：HLLL LHH

⑪「どこへ届けますか」　大阪弁 HHH HHHHHH

HHH HHHHHL：3、HLL HHHHHH：3、HLL LHHHHH：3、LHH HHHHHH：1

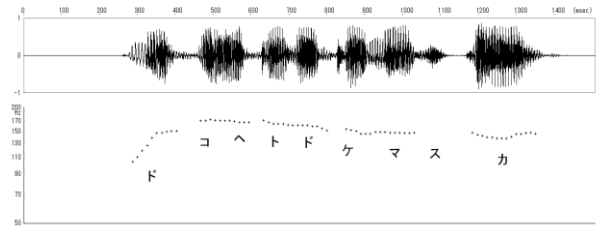


図 11-1：大阪弁

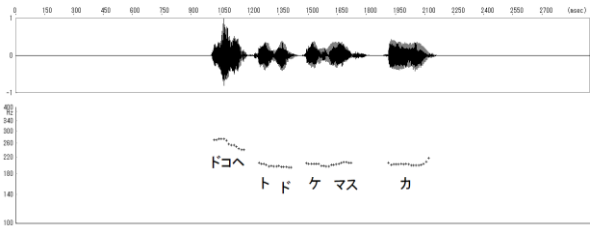


図 11-2：HLL HHHHHH

⑫「外国語を勉強しに旅行します」　大阪弁 LLLLLH HHHHHH LLLHHH
LHHHHH HHHHHH LHHHHH：5、LHHHHH LLLLHL HHHHHL：2、
LHHHHH LLLLHL LLLHHH：1、HHHHHH LLLLHL LLLHHH、1
LLHHHL HHHHHH LLHHHH：1
→「外国語を」　LHHHHH：8、HHHHHH：1、LLHHHL：1
「勉強しに」　HHHHHH：6、LLLLHL：4
「旅行します」　LHHHHH：5、HHHHHL：2、LLLHHH：2、LLHHHH：1

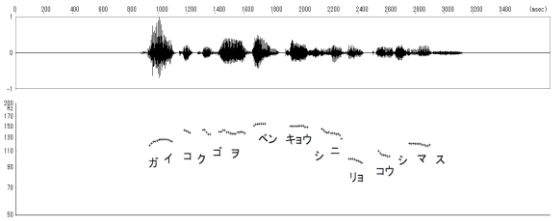


図 12-1：大阪弁

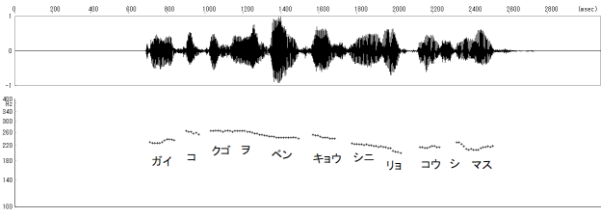


図 12-2：LHHHHH HHHHHH LHHHHH

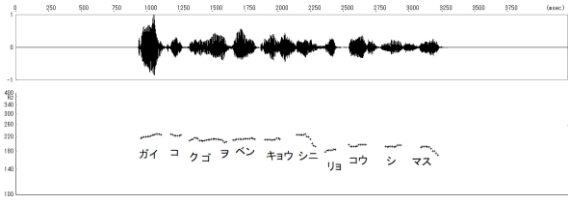


図 12-3：HHHHHH LLLLHL LLLHHH

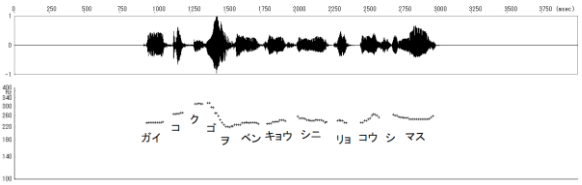


図 12-4：LLHHHL HHHHHH LLHHHH

⑬「なんにも見えへん」　大阪弁 LLHL LHLL
HHHH HHLL：5、LLHL HHHL：4、LLLL HHLL：1

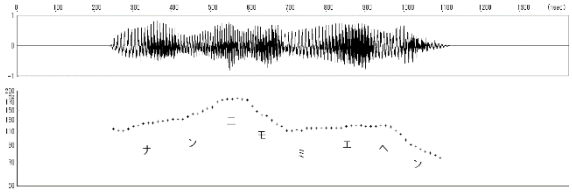


図 13-1：大阪弁

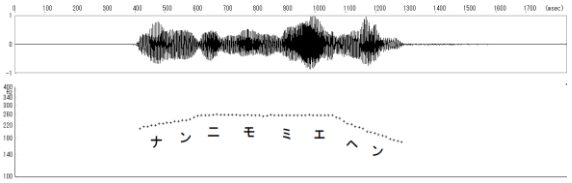


図 13-2：HHHH HHLL

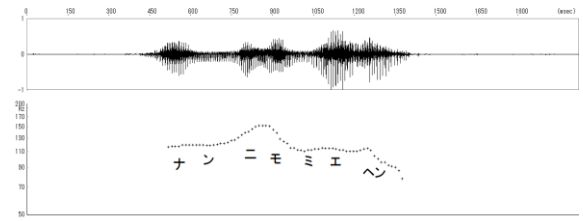


図 13-3：LLHL HHHL

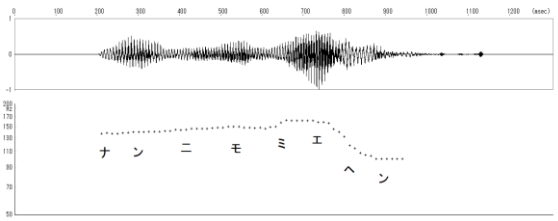


図 13-4：LLLL HHLL

⑭「お邪魔ちゃいますか」　大阪弁 LLL HHHHH
LHH HHHHH：6、HHH HHHHH：3、LHH LLLLH：1

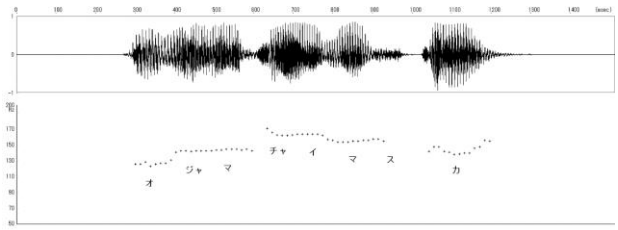


図 14-1：大阪弁

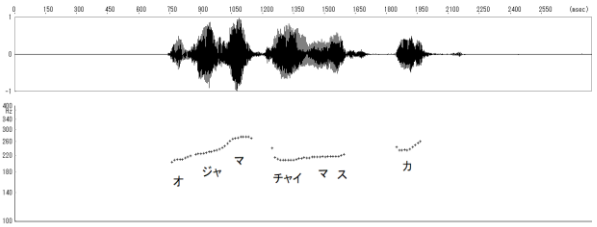


図 14-2：LHH LLLLH

⑮「すんません、遅れてしもて」　大阪弁 LLLHH HHHH HLL
LLLHH HHHH HLL：7、HHHHL HHHH HLL：1、HHHHL LHHH HLL：1、
LHHHL LLLL HLL：1
→「すんません」　　LLLHH：7、HHHHL：2、LHHHL：1
　「遅れてしもて」　HHHH HLL：8、LHHH HLL：1、LLLL HLL：1

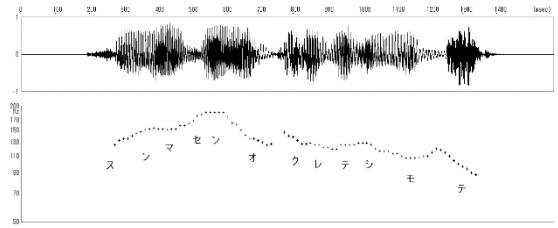


図 15-1：大阪弁

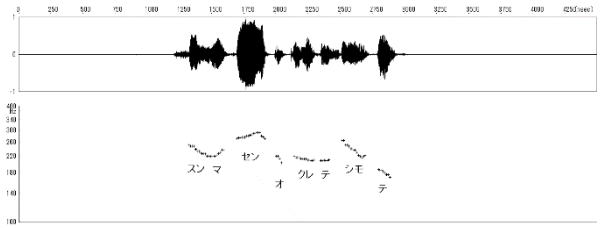


図 15-2：LLLHH HHHH HLL

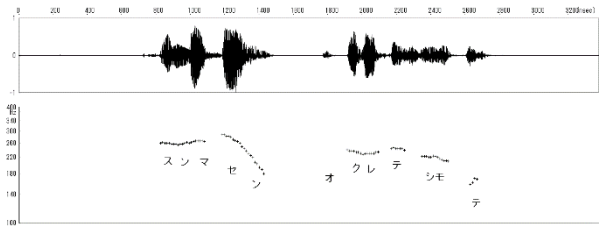


図 15-3：HHHHL HHHH HLL

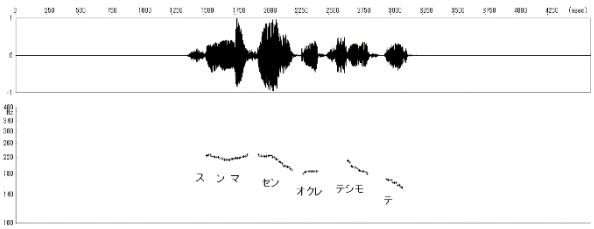


図 15-4：LHHHL LLLL HLL

⑯「頭を上げておくんなはれ」　大阪弁 LHLL HHH HHHHLL　(区切って言えば LLLHLL)
LHHL LLL LHHHHL：5、LHHL LLL LHHHHH：3、LHHL LLL HHHHHH：1、
LHHL LLL LHHHLL：1
→「頭を」　　LHHL：10　　「上げて」　LLL：10
　「おくんなはれ」　LHHHHL：5、LHHHHH：3、HHHHHH：1、LHHHLL：1

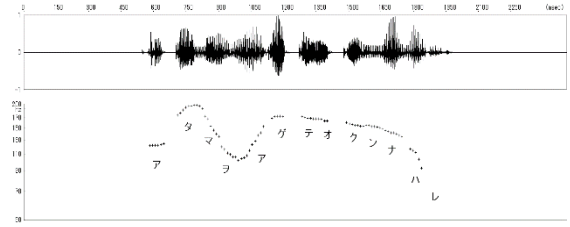


図 16-1：大阪弁

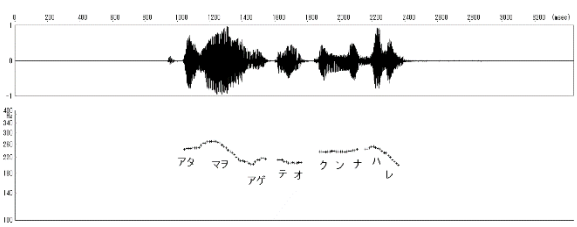


図 16-2：LHHL LLL LHHHHL

⑰「萬田銀次郎の名がすたりまんがな」　大阪弁 LLL HLLLLL HH HHHHHLL
HHH HLLLLL LL HHHHLLL：7、LLL HLLLLL LL HHHHLLL：2、
HHH HLLLLL LH HHHHLLL：1
→「萬田銀次郎の」　HHH HLLLLL：8、LLL HLLLLL：2
「名が[17]」　LL：9、LH：1
「すたりまんがな」　HHHHLLL：10

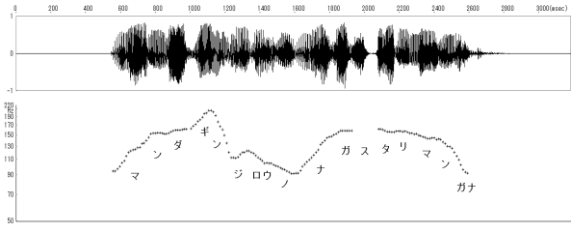


図 17-1：大阪弁

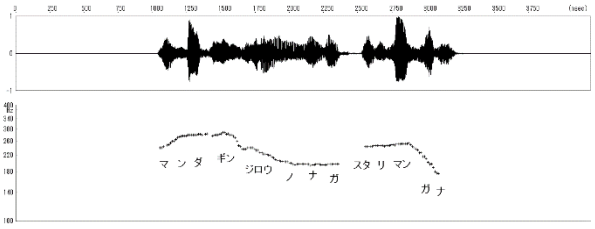


図 17-2：HHH HLLLLL LL HHHHLLL

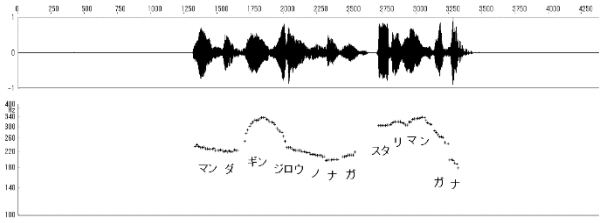


図 17-3：LLL HLLLLL LL HHHHLLL

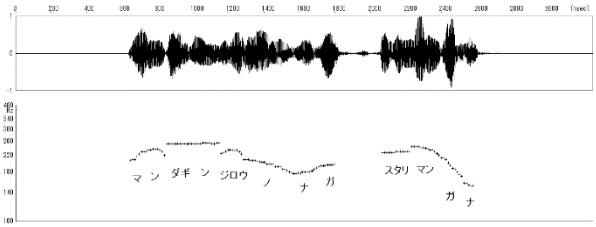


図 17-4：HHH HLLLL LH HHHHLLL

⑱「銭借りたモンは、死ぬ権利なんてあらへん」　大阪弁 LL HLL HLL HH HLLLLL LHLL
HL LLL HLL LH HLLLLL HLLL：4、HL LLL HLL LH HLLLLL HLHH：1
LH LLL HLL LH HLLLLL LHLL：1、LH LLL LLL LH HLLLLL LHLL：1
LH LLL HLL HH HLLLLL LHLL：1、LH HHH HLL HH HLLLLL HLLL：1
LL HLL LLL HH HLLLLL HHLL：1
→「銭」　HL：5、LH：4、LL：1
「借りた」　LLL：8、HHH：1、HLL：1
「銭借りた」　HL LLL：5、LH LLL：3、LH HHH：1、LL HLL：1
「モンは」　HLL：8、LLL：2
「銭借りたモンは」　HL LLL HLL：5、LH LLL HLL：2、LH LLL LLL：1、
LH HHH HLL：1、LL HLL LLL：1
「死ぬ」　LH：7、HH：3
「権利なんて」　HLLLLL：10
「あらへん」　HLLL：6、LHLL：3、HLHH：1

[17] 大阪弁における 1 拍語は、単独では 2 拍分の長さで発音され (例：火 L0→ヒーLH、日 H1→ヒーHL)、助詞が後続した場合でも 2 拍分の長さになることがある (福盛 2001)。しかし、連体修飾節が前節する場合には、1 拍分の長さで発音する人の方が多いだろう。モデル音声も 1 拍分の長さで発音されている。よって、大阪弁らしさにおける 1 拍語の母音の長さに関わる問題は、本稿では扱っていない。

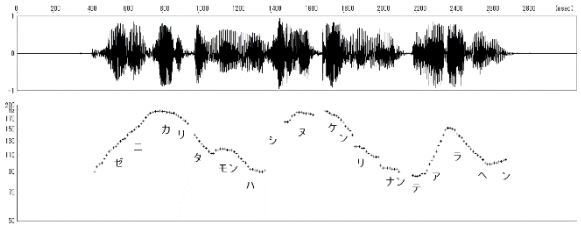


図 18-1：大阪弁

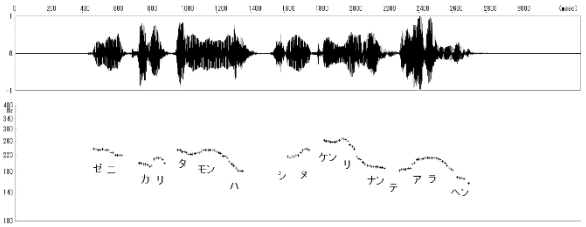


図 18-2：HL LLL HLL LH HLLLLL HLLL

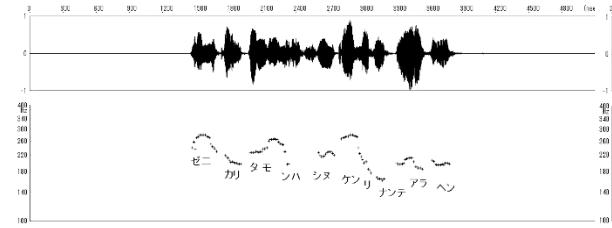


図 18-3：HL LLL HLL LH HLLLLL HLHH

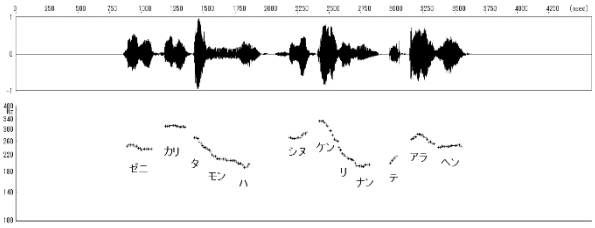


図 18-4：LL HLL LLL HH HLLLLL HHLL

⑲「去年、奈良のもみじを由美と見た」　大阪弁 HLL HLL HLLL HLL HL

HLL HLL HLLL HLL HL：7、LHH LHL LLLL HLL HL：2、LHH LLL HLLL HLL LH：1

→「去年」　　HLL：7、LHH：3

「奈良の」　　HLL：8、LHL：1、LLL：1

「もみじを」　HLLL：9、LLLL：1

「奈良のもみじを」　HLL HLLL：8、LHL LLLL：1、LLL HLLL：1

「由美と」　　HLL：10

「見た」　　HL：9、LH：1

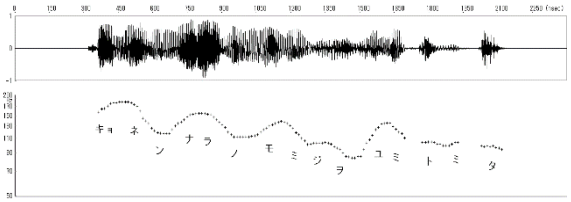


図 19-1：大阪弁

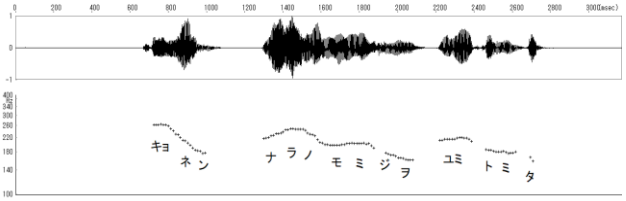


図 19-2：HLL HLL HLLL HLL HLL

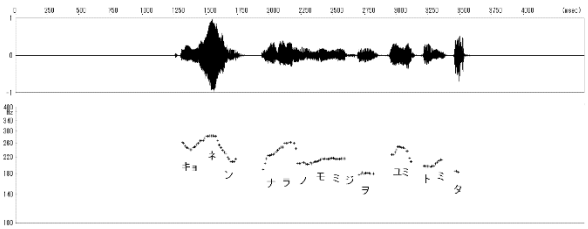


図 19-3：LHH LHL LLLL HLL HL

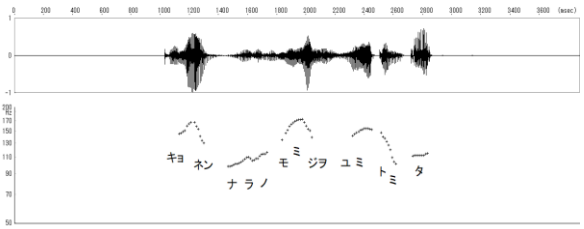


図 19-4：LHH LLL HLLL HLL LH

3.2　結果のまとめ

本項では、それぞれの文に対してどのように音調が異なっているかを列記していく。「’」はアクセントの下がり目、「↑」はイントネーションによる強調型上昇調。「L○あるいは H○」は式音調を

示し、〇で示す数字は前から数えた拍の後ろに下がり目があることを、0 は下がり目がないことを示す。被調査者の音調に対し◎がついているものは、大阪弁の音調と同じであることを示す。また、低起式の句の後ろに+をつけたものは語末の高くならないことを示し、L0 の後ろに/をつけたものは語末の音節が高くなることを示す。なお、？に関わる疑問型上昇調については本稿では扱わないことにする。

①「こんにちは」
大阪弁　L2 コン’ニチワ　(強調形　L2 コン’ニチ↑ワ)
LHHHH：8　句音調による平板型になっている。
HLLLH：2　下がり目の位置が異なり、強調型上昇調がある。

②「ありがとう」
大阪弁　L4 アリガト’ー
◎LLLHL：9
LHHHL：1　下がり目の位置はあっているが、句音調になっている。

③「ごめんな」
大阪弁　L0 ゴメンナ
LHHH：6　句音調による平板型になっている。
HHHH：2　高起式による高平型になっている。
LHLH：2　下がり目の位置が異なっている。 (語末は強調型上昇調)

④「さいなら」
大阪弁　H0 サイナラ　(強調形　H1 サ'イ↑ナ’ラ)
◎HLHL：1
LLHL：7　「サイ」の下がり目の位置が異なる。
HHHL：2　高起式であるが、下がり目の位置が異なる。

⑤「ほな」
大阪弁　H1 ホ’ナ
◎HL：10

⑥「何すんねん」
大阪弁　L0 ナニ+H2 スン’ネン
LH HHLL：9　「ナニ」が句音調になっている。
HH HHLL：1　「ナニ」が高起式になっている。

⑦「ようわからん」
大阪弁　H1 ヨ’ー　H2 ワカ’ラン
HL LHHL：6　後半が句音調で、下がり目の位置が異なっている。
LL HLLL：2　前半が低起式で、後半は下がり目の位置が異なっている。
HL HHHH：1　後半が高平になっている。

HH HHHL：1　前半は高平で、後半は下がり目の位置が異なっている。

⑧「馬鹿にせんといてや」
大阪弁　L0 バカニ+H0 セントイテヤ
LHH HHHHHH：5　　前半が句音調による平板型になっている。
LHH LHHHHH：5　　前半後半共に句音調による平板型になっている。

⑨「どないしたん？」
大阪弁　H0 ドナイ　H1 シ’タン
LHH HLL：7　　前半が句音調による平板型になっている。
LLL HLL：1　　前半が低起式になっている。
LLL HHH：1　　後半が高平になっている。
HHH LHH：1　　後半が句音調による平板型になっている。

⑩「酔うたらアカン」
大阪弁　L3 ヨータ’ラ　H0 アカン
◎LLHL HHH：3
HLLL LHH：6　　前半が高起式、後半が句音調になっている。
LHHL LHH：1　　前半は下がり目はあっているが句音調､後半は句音調よる平板型になっている。

⑪「どこへ届けますか」
大阪弁　H0 ドコエ　H0 トドケマスカ
HHH HHHHHL：3　　後半の下がり目の位置が異なっている。
HLL HHHHHH：3　　前半の下がり目の位置が異なっている。
HLL LHHHHH：3　　前半の下がり目の位置が異なり、後半は句音調による平板型になっている。
LHH HHHHHH：1　　前半が句音調による平板型になっている。

⑫「外国語を勉強しに旅行します」
大阪弁　L0 ガイコクゴオ　H0 ベンキョーシニ　L0 リョコー+H0 シマス
「外国語を」
LHHHHH：8　句音調による平板型になっている。
HHHHHH：1　高平になっている。
LLHHHL：1　低起式だが 3 拍目で上昇し、下がり目の位置が異なっている。
「勉強しに」
◎HHHHHH：6
LLLLHL：4　低起式になっており、下がり目の位置が異なっている。
「旅行します」
LHHHHH：5　句音調による平板型になっている。
HHHHHL：2　高起式になっており、下がり目の位置が異なっている。
◎LLLHHH：2

LLHHHH：1　低起式だが 3 拍目で上昇している。

⑬「なんにも見えへん」
大阪弁　L3 ナンニ’モ　L2 ミエ’ヘン LLHL LHLL
HHHH HHLL：5　前半が高起式による平板型､後半は下がり目の位置はあっているが高起式になっている。
LLHL HHHL：4　後半が高起式になっており、下がり目の位置が異なっている。
LLLL HHLL：1　前半が低起式による平板型､後半は下がり目の位置はあっているが高起式になっている。

⑭「お邪魔ちゃいますか」
大阪弁　L0 オジャマ+H0 チャイマスカ
LHH HHHHH：6　全体を句として、平板型になっている。
HHH HHHHH：3　全体を句として、高起式による平板型になっている。
LHH LLLLH：1　前半が句音調による平板型、後半は低起式による平板型になっている。

⑮「すんません、遅れてしもて」
大阪弁　L0/スンマセン　H0 オクレテ　H1 シ’モテ
◎LLLHH HHHH HLL：7
「すんません」
◎LLLHH：7
HHHHL：2　高起式になっており、下がり目の位置が異なっている。
LHHHL：1　句音調になっており、下がり目の位置が異なっている。
「遅れてしもて」
◎HHHH HLL：8
LHHH HLL：1　前半が句音調による平板型になっている。
LLLL HLL：1　前半が低起式による平板型になっている。

⑯「頭を上げておくんなはれ」
大阪弁　L2 アタ’マオ　H0 アゲテ+H4 オクンナ’ハレ　(H0 アゲテ　L4 オクンナ’ハレ)
「頭を上げて」
LHHL LLL：10　「頭を上げて」が句音調になっており、下がり目の位置が異なっている。
「おくんなはれ」
LHHHHL：5　句音調になっており、下がり目の位置が異なっている。
LHHHHH：3　句音調による平板型になっている。
HHHHHH：1　高平になっている。
LHHHLL：1　下がり目の位置は正しいが、句音調になっている。

⑰「萬田銀次郎の名がすたりまんがな」
大阪弁　L0 マンダ+H1 ギ’ンジローノ　H0 ナガ　H5 スタリマ’ンガナ
「萬田銀次郎の」
◎LLL HLLLLL：2

HHH HLLLLL：8　　前半が高平になっている。
「名が」
LL：9　　低起式による平板型になっている。
LH：1　　句音調による平板型になっている。
「すたりまんがな」
HHHHLLL：10　　下がり目の位置が異なっている。

⑱「銭借りたモンは、死ぬ権利なんてあらへん」
大阪弁　L0 ゼニ+H1 カ’リタ　H1 モ’ンワ　H0 シヌ　H1 ケ’ンリナンテ　L2 アラ’ヘン
「銭」
◎LL：1
HL：5　　高起式による頭高型になっている。
LH：4　　句音調による平板型になっている。
「借りた」
◎HLL：1
LLL：8　　低起式による平板型になっている。
HHH：1　　高平になっている。
→「銭借りた」
◎LL HLL：1
HL LLL：5　「ゼニカリタ」を句として、頭高型になっている。
LH LLL：3　「ゼニカリタ」を句として、2 番目の拍が高くなっている。
LH HHH：1　「ゼニカリタ」を句として、平板型になっている。
「モンは」
◎HLL：8
LLL：2　　低起式による平板型になっている。
→「銭借りたモンは」
HL LLL HLL：5　　頭高型、低起式による平板型の順になっている。
LH LLL HLL：2　　「ゼニカリタ」を句として、2 番目の拍が高くなっている。
LH LLL LLL：1　　全体を句として、2 番目の拍が高くなった後、「モンワ」が平板型になっている。
LH HHH HLL：1　　句音調による平板型、高平の順になっている。
LL HLL LLL：1　　全体を句として、「モンワ」が平板型になっている。
「死ぬ」
◎HH：3
LH：7　　句音調による平板型になっている。
「権利なんて」
◎HLLLLL：10
「あらへん」
◎LHLL：3
HLLL：6　　頭高型になっている。
HLHH：1　　頭高型で、「へン」が強調型上昇調になっている。

⑲「去年、奈良のもみじを由美と見た」
大阪弁　H1 キョ’ネン H1 ナ’ラノ H1 モ’ミジオ H1 ユ’ミト H1 ミ’タ
◎HLL HLL HLLL HLL HL：7
「去年」
◎HLL：7
LHH：3　　句音調による平板型になっている。
「奈良の」
◎HLL：7
LHL：2　　句音調で 2 番目の拍が高くなっている。
LLL：1　　低起式による平板型になっている。
「もみじを」
◎HLLL：8
LLLL：2　　低起式による平板型になっている。
→「奈良のもみじを」
◎HLL HLLL：8
LHL LLLL：1 全体を句として、2 番目の拍が高くなっている。
LLL HLLL：1 全体を句として、「モミジオ」の 1 拍目が高くなっている。
「由美と」
◎HLL：10
「見た」
◎HL：9
LH：1　　句音調による平板型になっている。

4. 考察

4.1 式音調について

4.1.1 句音調が式音調の邪魔をする

共通語を日常的に用いている話者にとっては、大阪弁を喋ろうとしても句音調が負の言語転移となってしまう。句音調は、1 拍目から 2 拍目で上昇してから下がり目が指定されない限り自然下降調が続くというイントネーションによる音調である。大阪弁の式音調は、高起式であれば下がり目が指定されない限り高平が続き、低起式であれば下がり目の指定があればその直前まで、なければアクセント句末から 2 番目の拍まで低平が続く。こういった高平や低平の連続が発音できないことが、エセ大阪弁になってしまう 1 つの要因となっている。例えば、①「こんにちは」LHHHH、⑥「なに」LH、⑨「どない」LHH、⑩「あかん」LHH、⑪「どこへ」LHH、⑫「外国語を」LHHHHH、「旅行します」LHHHHH、⑭「お邪魔」LHH、⑮遅れて「LHHH」、⑯「おくんなはれ」LHHHHH などが、句音調による負の言語転移となっている。

しかし、被調査者は大阪弁を意識して話しているので、全ての場合において高平や低平ができないわけではない。例えば、③「ごめんな」HHHH、⑦「わからん」HHHH、⑬「なんにも」HHHH、⑭「ちゃいますか」HHHHH、⑰萬田「HHH」、⑯「おくんなはれ」HHHHHH などでは高平になっているが、これらは大阪弁アクセントとしては適切ではない。一方で、⑧「せんといてや」HHHHHH、⑪「届けますか」HHHHHH、⑫「勉強しに」HHHHHH では大阪弁アクセントとして一見適切であるように見えるが、これらは句音調によって実現した H の連続であり高平ではない。例えば、⑧「馬鹿にせんといてや」においては、LHH LHHHHH と LHH HHHHHH という音調が観察された。前者

は{バカニ}{セントイテヤ}のように 2 つのアクセント句に分けて捉えたため、それぞれの句頭が上昇している。それに対し、後者は{バカニセントイテヤ}のように 1 つのアクセント句として捉えたため H 続きで示したが、発音は大阪弁とは異なるというわけである。この点については、4.3 節で再度取りあげる。

句音調が低平への負の言語転移となっている例として、⑯「頭を上げて」LHHL LLL や⑱「銭借りたモンは」LH LLL LLL、LL HLL LLL が挙げられる。これらの例では後半部の「上げて」や「モンは」が自然下降調で後続した結果、大阪弁アクセントとしては適切でない音調となっている。また、⑥「何すんねん」や⑱「銭借りた」は低起式＋高起式の組み合わせでアクセント句として一まとまりになり、式保存の法則が働く。「何」や「銭」は単独では LH であるが、高起式が後続してアクセント句となる場合には、後項の高起式で高く発音されるところまで低平が続く。これについては、⑥「何すんねん」LH HHLL や⑱「銭借りた」LH HLL のように前項の低平が実現できていない例が観察された。

4.1.2　式音調が脳内辞書に入っていない

共通語の平板型は語中で下がらないという指定であるが、大阪弁では高起式なら高平、低起式なら語末が高くなるという指定である。従って、アクセント型が適切であっても、式音調を脳内辞書で指定できなければ、適切な大阪弁にはならない。

③「ごめんな」HHHH や⑫「外国語を」HHHHHH では平板とは捉えているが、低起式だと指定できていない。⑭「ちゃいますか」LLLLH では平板と捉えているが、高起式だと指定できていない。⑰「萬田銀次郎の」HHH HLLLLL では平板＋頭高、⑥「何すんねん」HH HHLL では平板＋-3 型、⑭「お邪魔ちゃいますか」HHH HHHHH では平板＋平板とは捉えているが、前項を低起式だと指定できていないので、式保存の法則をふまえた音調になっていない。⑨「どないしたん？」LLL HLL や⑮「遅れてしもて」LLLL HLL では平板＋頭高とは捉えているが、前項が高起式だと指定できていない。また、下がり目を指定する語の例を挙げると、⑬「見えへん」では-3 型と捉えているが低起式と指定できていないため、HHLL となっている。

結果として、高平や低平を発音できているのだが、式音調の指定ができていないため、適切な大阪弁の音調でなくなっている。そして、これらの音調は大阪弁話者にとって違和感を覚えるだけでなく、かなり嫌な感じがする音調となっている。

4.2　アクセント型について

アクセント型については、共通語そのままで発音されるより、共通語でも大阪弁でもないアクセント型で発音されるのが、エセ大阪弁感をより引き立たせる。結果として、大阪弁話者は発話者がバカにした大阪弁を喋っているという印象を抱く。これについては、例えば「橋」「箸」「端」といった最小対によるアクセントの説明が、その一因を担っていると考えられる。「橋」は、大阪弁では H1 型、共通語では尾高型なので、格助詞「が」を後続させると、大阪弁では「H ハ’シガ (HLL)」、共通語では「ハシ’ガ (LHL)」となる。「箸」は、大阪弁では L0 型で「L ハシガ (LLH)」、共通語では頭高型で「ハ’シガ (HLL)」となり、「端」は大阪弁では H0 型で「H ハシガ (HHH)」、共通語では平板型で「ハシガ (LMM～LHH)」となる。この説明をふまえて、共通語アクセントの下がり目の位置、あるいは高くなる拍を変えれば大阪弁のアクセントになるという単純理解が、エセ大阪弁を生み出す要因となっている。

挨拶語における、①「こんにちは」HLLLH (図 1-2)、③「ごめんな」LHLH (図 3-2)[18]、④「さいなら」LLHL (図 4-3)、HHHL (図 4-4)といった音調は大阪弁話者が嫌う音調であり、初対面での印象が悪くなってしまう。 ⑦「わからん」における H2 型を頭高に捉えた HLLL (図 7-2)、⑨「したん」における H1 型を高平と捉えた HHH (図 9-4)、⑫「勉強しに」における H0 型を-2 型に捉えた LLLLHL (図 12-3)、⑰「すたりまんがな」における H5 型 (-3 型)を 1 拍ずれた-4 型に捉えた HHHHLLL (図 17-2,3,4)、⑱「あらへん」における L2 型を頭高に捉えた HLLL (図 18-2)や HLHH (図 18-3)といった音調も大阪弁話者が嫌う音調である。

また、⑫「外国語を」における LLHHHL (図 12-4)は、共通語の句音調でも大阪弁の低起式でもなく、下がり目の位置も異なるため、大阪弁話者には違和感を覚える。⑲「去年、奈良のもみじを由美と見た」は共通語においても大阪弁においても全て頭高型である。しかし、大阪弁を意識してしまうと「奈良のもみじを」を LHL LLLL (図 19-3)や LLL HLLL (図 19-4)のように発音してしまう例があり、この音調も違和感がある。

ただし、本調査における被調査者による②「ありがとう」では、10 人中 9 人が LLLHL (図 2-2)といったように式音調もアクセント型も適切であった。この点については、短文であれば大阪弁の音調をそのまま脳内辞書に蓄積できる可能性を示唆している。

4.3 2 段観表記では一致しているけれども違和感がある発音

本稿ではそれぞれの音調を文節分かち書きに基づく 2 段観表記で示したが、この表記が一致しているからといって発音の自然さが一致しているわけではない[19]。例えば、②「ありがとう」、⑤「ほな」、⑮「すんません」については違和感がない例が多数派だった。一方で、⑫「外国語を勉強しに」や⑮「遅れてしもて」は違和感がある例が見られた。

⑫「勉強しに」は、HHHHHH であれば表記上は一致している。しかし、エセ大阪弁では共通語の句音調が負の転移となっている。「勉強しに」は「外国語を」に続く形での平板型であるため、聞こえは自然下降調となる (図 12-2)。それに対して、大阪弁の「勉強しに」は高起式下がり目なしの高平であるため、はっきりと高さを維持する発音である (図 12-1)。よって、両者は同じようには聞こえず、大阪弁としては違和感を覚える。ただし、⑧「馬鹿にせんといてや」における「せんといてや」や⑪「どこへ届けますか」における「届けますか」については、HHHHHH の高平に違和感がない例が一部観察された。⑫においては大阪弁の語形がなく文字表記としては共通語と同じであり、⑧とは異なるという要因が考えられるが、⑪は⑫と同様であるため、被調査者個人の大阪弁への適応度の違いが反映されたと考えられる。

⑮「遅れてしもて」は、文節分かち書きをすれば HHHH HLL となるが、大阪弁では一続きに発音する方が自然である (図 15-1)。よって、図 15-3 のように一続きに発音していれば違和感はないが、図 15-2 のように間を区切ってしまうと、「しもて」の「し」が高くなり違和感を覚える。この点は 4.4.1 節に後述する⑲「奈良のもみじを」と関連する。「奈良のもみじを」では後項の「もみじを」の「も」が高い方が大阪弁っぽく聞こえるのだが、「遅れてしもて」では後項の「しもて」の「し」を

[18] 「ごめんな」において 2 モーラ目の後ろに下がり目があるアクセントは、郡 (1997: 198)で大阪弁話者に嫌われる音調の例 (L ゴメ'ン↗ネ)として挙げられているが、「LHLL (文末に疑問型上昇調あるいは強調型上昇調が加わることがある)」と発音する大阪弁話者は少なからず存在する。しかし、筆者の内省ではこの音調には違和感を覚えるため、エセ大阪弁として扱うことにする。

[19] 句音調、アクセントによる下がり目、大阪弁の式音調の仕組みが分かっていれば、抽象的な表記でも読者は理解できるのだが、そうでない読者への配慮を考えると、より具体的な 2 段観表記の方が分かりやすいだろうと判断した。ただし、当該言語が分からなくても、一目見ただけで音調が分かる段階観表記以外の方法を検討すべきだという課題を残している。

高くすることによってエセ大阪弁感が増してしまう。前者は連体修飾、後者は連用形＋補助動詞というように統語構造が異なり[20]、両者のアクセントの違いが分かっていなければ、適切な大阪弁の音調ではなくなってしまうということである。

なお、⑩「酔うたらアカン」については、3 名が LLHL HHH で発音していた (図 20-2～4)が、この 3 名については、エセ大阪弁感はなく、大阪弁に聞こえる音調であった。

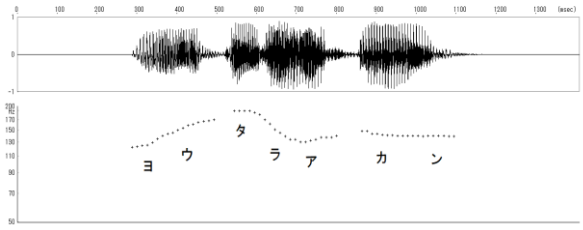


図 20-1：大阪弁 (図 10-1 再掲)

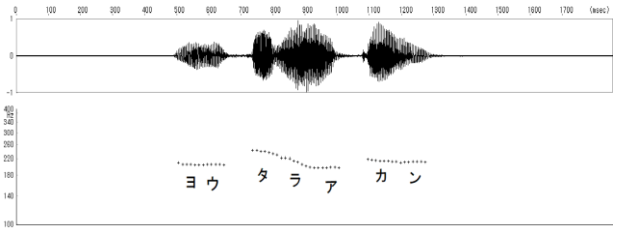


図 20-2：酔うたらアカン LLHL HHH (1)

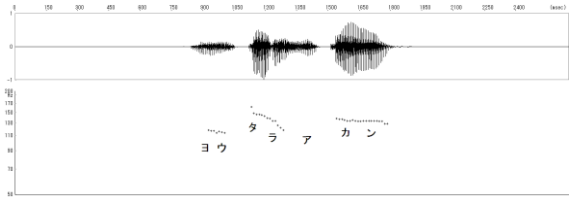


図 20-3：酔うたらアカン LLHL HHH (2)

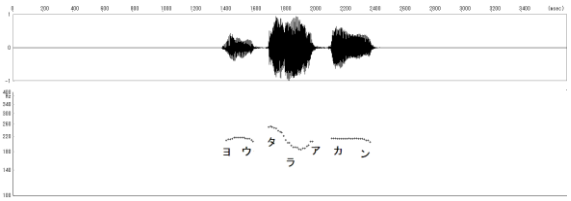


図 20-4：酔うたらアカン LLHL HHH (3)

4.4 郡 (2004)説の検証

⑲「去年、奈良のもみじを由美と見た」については、共通語と大阪弁とでアクセントは頭高型で一致している。この点は、被調査者にとっては想定外であったと推測できる。⑲を読みあげる際に大阪弁を強く意識すると、式音調やアクセント型を不自然なまでに変えて発音してしまっている(図 19-3、19-4)。こういった例は、典型的なエセ大阪弁の 1 つだと言える。一方で、⑪「どこへ届けますか」や⑫「外国語を勉強しに旅行します」と同様に、大阪弁の語形が表れず、共通語と同じ文字表記の例文であれば、大阪弁を意識しつつ発音しようと思っても想像がつかずに悩んでしまった被調査者がいた。結果としてエセ大阪弁のつもりでほぼ共通語のまま発音してしまっている例があった (図 19-2)。本項では、そういった事情をふまえて郡 (2004)説に対する検証を行う。

4.4.1 「「奈良の」のピークと、後続する「もみじを」のピークとの高さの差」について

郡 (2004:45)では、「「奈良の」 のピークの高さから，後続する「もみじを」の高さを引いた値であるが，東京 (平均 4.5st) よりも大阪 (平均 3.1st) の方が，わずか 1.4st であるが有意に大きい。」という指摘がある。⑲「去年、奈良のもみじを由美と見た」は、共通語においても大阪弁においても全て頭高型である。7 名のエセ大阪弁では全て頭高型であったので、この例文においてエセ大阪弁と大阪弁に関して追検証することができる。結果としてエセ大阪弁の平均が 3.5st であったのに対し、大阪弁は 2.0st であり、有意差 (t (7)=2.52, p<.05)が得られた。ただし、郡 (2004:46)では東京方言話者でピーク差が 5.0st を超える者がいたが、本調査における被調査者ではそのような話者はい

[20] 査読者から共通語話者でも統語構造の違いは認知できるのではないかという指摘を受けたが、それはその通りである。ただし、統語構造の違いは認知できても、統語構造の違いに伴う大阪弁アクセントの違いを分かっていないということが、エセ大阪弁になってしまう要因である。

なかった (図：21)。7 名中 1 名は 2.1st であったが、他の 6 名は 3.0st 以上であった。この 1 名がエセ大阪弁を脱しているかといえばそうではなく、高低変化が少ないためピークの差が小さかっただけであった (図：22)。こういった点から、エセ大阪弁が大阪弁になり切れない要因として、下降量の違いも一因として挙げられる[21]。

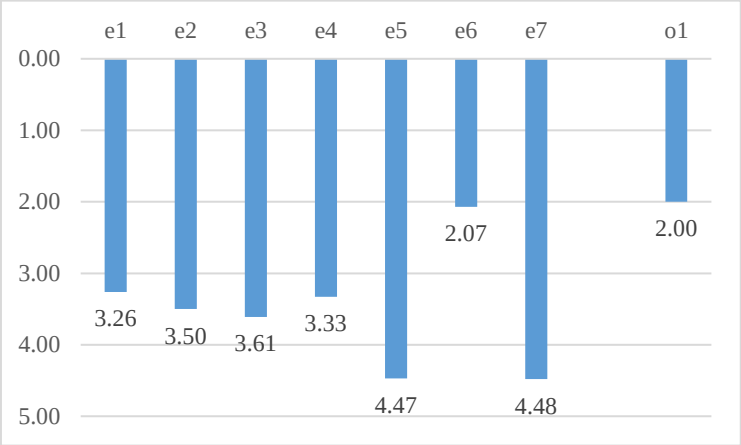


図 21：「奈良の」と「もみじを」におけるピーク差
(単位：st、e はエセ大阪弁、o は大阪弁)

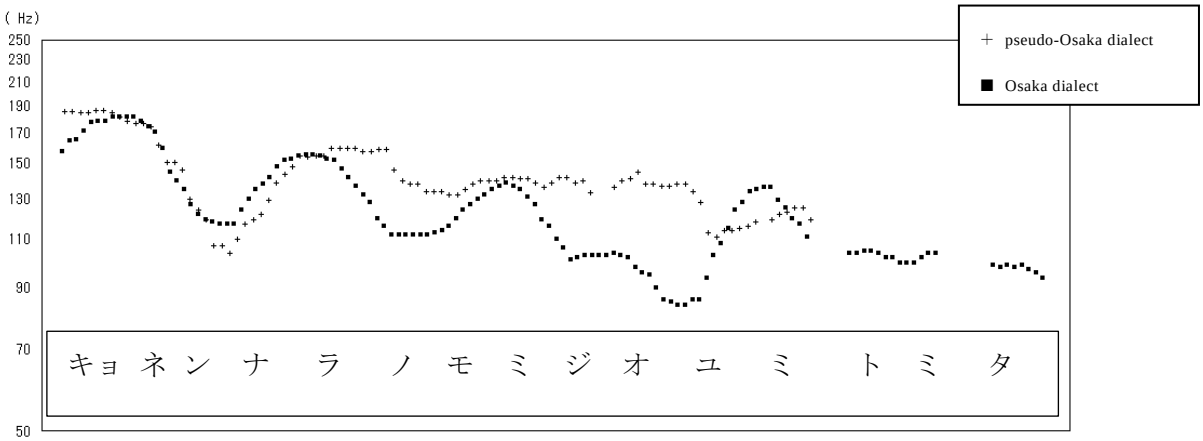


図 22：「去年奈良のもみじを由美と見た」における基本周波数曲線 (＋エセ大阪弁、■大阪弁)

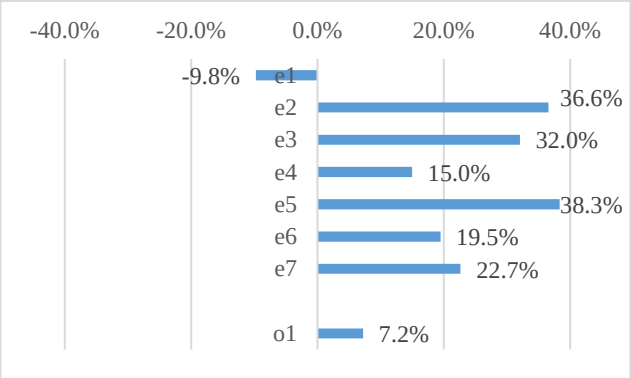
4.4.2 「ピークのずれ方が東京と大阪で異なる」について

郡 (2004:47)では、「特に「奈良の」の場合、ピークのずれ方が東京と大阪で異なる。話者ごとのずれの大きさを (中略)示すが、ほとんどの東京方言話者は第 2 モーラ始点の後方にピークがずれこんでいるのに対し、大阪では第 2 モーラ始点より前にある話者が、かなりいることがわかる」という指摘がある。この点についても、4.3.1 節同様にエセ大阪弁のつもりで⑲「去年、奈良のもみじを由美と見た」を全て頭高型で発音した 7 名を対象として追検証する。

まずは、「奈良の」についてだが、本調査では発話速度の統制を行なっていないので、「奈良の」における[ara]の持続時間長を 100%として設定し、2 モーラ目の[ra]より前か後であるかを 100 分率

[21] 他の追検証として、⑱「銭借りたモンは」で LL HLL HLL と発音できたエセ大阪弁があれば「借りた」と「モンは」のピーク差について計測できるのだが、本調査ではこの発音ができた者がいないため、やむなく断念した。

で示すことにする。結果として、エセ大阪弁の 1 名が 1 モーラ目にピークがあったが、他は全て 2 モーラ目にピークがあった。大阪弁モデル音声では、1 モーラ目にピークはなく、2 モーラ目の母音よりは前である[ɾ]にピークがあった。図 23-1 は[ɾa]の開始点を基準として、正の値なら 2 モーラ目の中に、負の値なら 1 モーラ目の中にピークがあることを示している。なお、郡 (2004)では有意差の有無は明記されていないが、本調査における 2 モーラ目の[a]より前にピークがあるエセ大阪弁 1 名および大阪弁とそれ以外を比べた結果、有意差 (t (6)=-3.49, p<.01)が得られた。



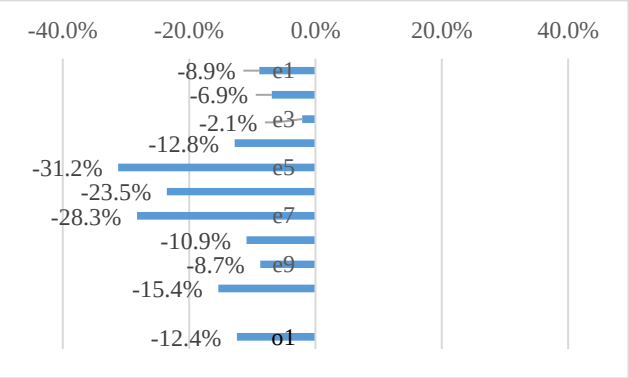


図 23-1：「奈良の」におけるピークの位置　　図 23-2：「ほな」におけるピークの位置
(0.0%が 2 モーラ目の視点。e：エセ大阪弁、o：大阪弁)

なお、このピーク間の差は、郡 (2004:47)において「もみじを」や「由美と」では認められないとされている。この点について、⑤「ほな」は被調査者全てが頭高で発音しており、大阪弁アクセントと一致している。だが、「ほな」については、本調査におけるエセ大阪弁および大阪弁において、全て 1 モーラ目にピークがあり (図 23-2)、その差を析出することはできなかった。値の示し方については、「奈良の」と同様に「ほな」全体を 100%とし、[na]よりピークが前なら負の値での百分率で示している。

5. 結語

本稿では、エセ大阪弁の音声学的特徴を検証してきた。結果として、句音調による負の言語転移、式音調ならびに式保存の法則が脳内辞書に入っていない、アクセントの下がり目の位置を意図的に変えてしまうといった要因が、エセを感じさせる理由となっていることを明らかにした。また、それぞれが単独の要因になっているだけではなく、複数の要因が組み合わさることで大阪弁話者に違和感を覚えさせる音調になっていることも指摘している。

なお、本稿にあげたエセ大阪弁の音声学的特徴が、エセ大阪弁の全ての形を示しているわけではない。あくまで、本調査における被調査者による音声の例を挙げたに過ぎない。よって、具体的にはまだまだ他の音調があることが予想されるが、基本的には本稿で記した要因で説明は可能であると考えている。

最後に、エセ大阪弁を嫌う大阪弁話者の意識について所感を述べておきたい。先述したように、大阪弁のイメージは、かつては反規範的であった。ただし、これは全国共通語や東京弁を規範とする立場からの観点であり、いわゆる関西弁は地域共通語として自らが規範として成り立っていると捉えている。従って、その規範から逸脱している音調で発音されるエセ関西弁を嫌うのである。こ

の点は、例えば NHK のアナウンサーのアクセントが違っていると感じて苦情を入れる[22]東京弁話者と根本は変わらないと考えられる。それは、自身の言葉 (あるいは規範と捉えている言葉)と異なる音調が耳に入ってきた時に違和感を覚えるという根本の部分が共通しているからである。だからといって、大阪弁話者と東京弁話者の間にある見えない対立が完全に解消されるわけではないが、それは本稿で論じる範疇ではないと考えるため、これ以上ふみこむことは避けることにする。また、広い意味で同胞意識を持とうとする、いわゆる関西人による関西弁という捉え方は、その範囲内における言葉の変種に対して許容度が高いからだと考えられる。よって、この変種についてはエセと感じないのであろう。

【参考文献】

青山剛昌 (2011)『名探偵コナン』74.小学館

井上史雄 (1989)『言葉づかい新風景（敬語と方言)』秋山叢書

上野善道 (1989)「日本語のアクセント」杉藤美代子編『講座日本語と日本語教育 2　日本語の音声・音韻 (上)』178-205.明治書院

NHK 放送文化研究所 (2016)『NHK 日本語発音アクセント新辞典』NHK 出版

岡本牧子・氏原庸子 (2006)『聞いておぼえる関西 (大阪)弁入門』ひつじ書房

尾上圭介 (1999)『大阪ことば学』創元社

金濱茉由 (2018)「エセ大阪弁の音響音声学研究」大東文化大学外国語学部日本語学科卒業論文

郡史郎 (1997)「日本語のイントネーション ― 型と機能」『日本語音声 2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』169-202、三省堂,

郡史郎 (2003)「イントネーション」上野善道編『朝倉日本語講座 3　音声・音韻』109-131.朝倉書店

郡史郎 (2004)「東京っぽい発音と大阪っぽい発音の音声的特徴」『音声研究』8-3:41-56.

郡史郎 (2011)「イントネーション」城生佰太郎・福盛貴弘・斎藤純男編『音声学基本事典』338-348.勉誠出版

城生佰太郎 (1989)『新装版 当節おもしろ言語学』講談社

城生佰太郎・福盛貴弘・斎藤純男 (2011)『音声学基本事典』勉誠出版

菅井康祐･福盛貴弘 (2001)「近畿方言話者の母音の無声化について : 音響分析に基づく生起環境の分類」『ことばの科学研究』2:1-13.

天王寺大 (2013)『ミナミの帝王最強スペシャル 鬼の目にもゼニ編』日本文芸社

早田輝洋 (1999)『音調のタイポロジー』大修館書店

福盛貴弘 (2001)「モーラと実験音声学」城生佰太郎編『コンピュータ音声学』151-205.おうふう

福盛貴弘 (2010)『基礎からの日本語音声学』東京堂出版.

福盛貴弘 (2014a)「アクセント観小考 ― アクセント核という用語を使わない理由 ―」『外国語学研究』15：157-162.

福盛貴弘 (2014b)「大阪方言 2000 文」『一般言語学叢第 17 号』1-151.

福盛貴弘 (2016)「国語科教科書におけるアクセントの説明に関する問題点」『教職課程センター研究紀要』1：99-106.

[22] アナウンサーのアクセントは放送用語としての規範であり、東京弁に近いアクセントを選んでいるが、日常語としての東京弁と一致しなくてもかまわない性質のものである。また、アクセントは時代を経て変化していくものであり、世代差があるのは当然のことであろう。『NHK 日本語発音アクセント新辞典』においては、アナウンサーの世代差についてある程度考慮されている。なお、正しい日本語を金科玉条とするかについては、個人の判断に委ねたい。

Phonetic characteristics of pseudo-Osaka dialect

Takahiro FUKUMORI† & Mayu KANAHAMA††

This study attempts to explore phonetic characteristics of the so-called pseudo-Osaka dialect, spoken by non-native Osaka dialect speakers. This dialect often makes native speakers feel uncomfortable because it includes the word forms and pitch patterns which are not usually found in the Osaka dialect. Many native speakers seem to dislike the accent and intonation patterns used in the pseudo-Osaka dialect, which seem to convey social functions that affect human relations. Native Osaka dialect speakers feel that the pseudo-Osaka dialect semantically and phonetically deviates from the traditional Osaka dialect and that their Osaka dialect is made fun of. The informants in the current study were 10 pseudo-Osaka dialect speakers who were born and raised in eastern part of Japan. They were asked to read 19 sentences aloud in their pseudo-Osaka dialect that they think of as Osaka dialect. The acoustic-phonetic analyses of the data indicated that 1) phrase intonation of common Japanese reflects negative transfer, 2) the speeches by non-native speakers do not distinguish between the pitch patterns of high-beginning and low-beginning, and 3) they also shift their accent falling mark intentionally.

†*Faculty of Foreign Languages*
Daito Bunka University
1-9-1 Takashimadaira, Itabashi, Tokyo 175-8571, Japan
E-mail: ICG01649@nifty.com

††*Member of the Japan Experimental Linguistics Society*